様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：１３８０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３７３０７４０

研究課題名（和文）近世・近代移行期の職業転換にみる近世の学問の意義と展開

研究課題名（英文）The Deployment and significance of academic learning in the late Edo Period focusing on career change during the late Edo to the Meiji period

研究代表者
松尾　由希子（Matsuo, Yukiko）

静岡大学・大学教育センター・講師

研究者番号：３０５８０７３２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、近世において村役人などを勤めた地域の指導者や「学制」成立期の小学校教員を対象とし、近世までの学習履歴が近代における彼らの職業転換や学習におよぼした影響について、3つの事例を通して検討した。事例対象者らは、新しい職務に就いたことで、近世とは異なる学問を身につけることになったが、その際近世までに修得した学問や学習環境（書籍などの物的環境や学問を取り巻く人間関係）を活かしていたことを実証した。

研究成果の概要（英文）： This study examines how the history of learning until the late Edo Period influenced career change for local leaders and school teachers in the beginning of the Meiji period. Three cases in this study reveal that new professions such as local leaders and school teachers which started in the beginning or the middle of the Meiji Period required different knowledge from that of the late Edo Period. However, the knowledge and learning environments in the late Edo Period including both, a physical environment such as book collections and human networks for academic learning, also contributed to start their new professions in the Meiji Period.

研究分野：日本教育史

キーワード：近世教育史　近代教育史　学習環境　人的ネットワーク

１．研究開始当初の背景

著者は近世後期の地域の指導者の家の蔵書を題材に、彼らが学芸の師匠や家業の取引先などの多様な人的ネットワークを駆使して書籍を蒐集し、その書籍を読んだり、書籍の勉強会を開いたりするなど、家の蔵書を活用し、熱心に学んだ実態について実証してきた。近世の人々の学習や学習環境の整備は、自らの家業及び地域における指導者としての「役」と関わりがあることを明らかにした[1]。近世の学習について、入江宏は「日本の近世社会は一種の生涯学習社会であったということができる」[2]と述べる。実際、近世には多様な教育機関が存在し、人々の学習活動を支えていたことがわかっている[3]。武士階級を除くと、地域の指導者たちがこれらの学習活動の主な担い手であった。

日本では、明治維新を境に政治主体が入れ替わり社会構造が変わったことで、家業を継げなくなり、これまでとは異なる職種に職業転換していく人々も現れた[4]。一方で、近代に入っても継続して地域の行政に影響を及ぼした近世の地域指導者層も存在していた[5]。ただし、継続して地域の行政に関わった人々も近世と近代では社会構造が変化したことで、近世と同様の職務を遂行していたとは考えにくい。上記したように、近世における主な学習動機は家業にあり、家業に就くことを前提に学んでいた。では、近代に入り、前時代と異なる職業（職務）に就いた場合、近世までの学習はいかせなかったのか。近世と近代のそれぞれの先行研究[6]や近代に入って職業（職務）転換をしていく人々の姿から、近代における近世の学問成果は、全て否定されたわけでなく、評価されたり、継続して学んでいったりしたものもあったと推測できる。近世・近代という社会について、日本史の領域では近世・近代の連続[7]や断絶[8]に関する議論があるが、教育史の領域では近世・近代を通じた学問習得やその背景について、実証的な研究はほとんど行なわれてこなかった。近代以降の学問習得のあり方については、学校教育機関を中心とした成果が積み重ねられている。一方で、近代初期について、個人の職業や生活と結びついた学習に関する研究は手薄であり、近代初期が前時代の影響を受けている社会状況を考えると、近世・近代の繋がりも視野に入れた研究を行なうことで、近代の教育や学習のあり方の全体像に迫ることができる。

以上の学術的背景をふまえて、本研究では、近代からみた近世までに習得した学問の意味について検討し、さらに近代社会や新たな職業に適応した学問習得の実態について言及する。

２．研究の目的

本研究は、近世までに村役人などを勤めた地域の指導者層や「学制」成立期の小学校教員の近世までの学習や経験が、近代の職業（職務）転換などその後の生き方に及ぼした影響について検討するものである。具体的に、以下の 3 点より明らかにしていく。

（1）　近世までに学んだ学問と学習環境
（2）　近世・近代移行期の職業（職務）転換と近世までの学問・学習環境との関連
（3）　近代の職業（職務）に対応した学問や学習環境のあり方

学習環境とは、学習を進めるための環境であり、①書籍などの物的環境②師匠などの人的環境③学習に関わる情報④教育機関などの空間環境が考えられる[9]。本研究では、この中から物的環境、人的環境、空間環境に着目する。

３．研究の方法

本研究は、3 地域（静岡県、福岡県、群馬県）に居住した人物の事例研究や量的研究を通じて、研究課題を明らかにする。対象となるのは、遠江国中村東海（現静岡県浜松市西区雄踏町宇布見）、筑前国高原謙次郎（現福岡県大野城市乙金）、「学制」成立期の群馬県の小学校教員である。主な資料として、中村東海については中村家文書（浜松市博物館寄託）、高原謙次郎については高原（謙）家文書（昭和 50 年度、福岡県立図書館がマイクロフィルムにて収集。以降、高原家文書と記す）という家文書を使用する。群馬県の小学校教員については、主に教員の履歴書（「学校設立伺指令」群馬県立公文書館所蔵、文書番号：2717）を用いる。

（1）　中村東海、高原謙次郎について

まず、近世・近代移行期に習得した学問や学習環境について明らかにするために、家文書の中でも特に家の蔵書に関わる史料（書籍、書籍貸借記録など）を用いる。これらの史料より、学習内容や事例対象者をとりまく学習環境も判明する。

次に、当該期の職業（職務）について明らかにするために、主に履歴書を題材とする。

（2）　群馬県の小学校教員について

79 名の履歴書には、「学制」前後（主に近世と近代）の教員の学習履歴が記されているため、その分析を通じて、前時代（近世）に身に付けた学習履歴（学習環境含）の評価を試み、新しい時代（近代）に必要となった学問習得とその学習環境について明らかにしていく。

3 つの事例を対照することで、それぞれの事例がもつ個別性だけでなく、事例に共通する一般性についても言及できる。

４．研究成果

（1）遠江国中村東海[10]（天保 5 年～大正 11 年）

中村東海は、幕末維新期に遠江国で神職を勤めていた人物である。2 回にわたり、神職の家へ養子入りした。明治に入ってからは、

遠江国だけでなく、若狭国など居住地域内外の神職をまとめるまでになった。時期は、幕末から2度目の養子先中村家に入る明治8年で区切る。

① 東海の学芸とそれをとりまく人的ネットワーク（明治8年まで）

履歴書より、近世において東海は俳諧、弓術、国学（和歌）を学んでいた。これらの学芸は神職という家業、地域（遠江国や三河国）で盛んだった学問を反映したものだった。

東海が蒐集したと考えられる書籍の中でも、貸借先などの情報が書き込まれたものを分析した結果、書籍の入手と貸出に関するネットワーク（学芸をとりまく人的ネットワーク）が判明した。東海の人的ネットワークは、実家の血縁者、東海と共通する学芸をする人、東海と同じ家業（神職）の人だった。書籍貸借の特徴は、互酬性にある。蒐集のみ、貸し出しのみという一方的な関係ではなく、相互に書籍貸借を行なっている様子がみられた。家の蔵書は家業や教養、居住地域における「家」の立場や権威という「家」のアイデンティティを示すものであるといわれる[11]。書籍をとりまく人的ネットワークは、家業や家人の教養などの「家」のアイデンティティを根拠に始まるが、その後、継続して貴重な書籍を貸借し合う中で双方の信頼が高まり、関係性も強化していくものと考えられる。本研究の事例は、家の蔵書が「家」のアイデンティティを示すという性質をもつために、相互貸借によって同質性の高い他家と信頼関係を構築し、強化する手段としても機能したことを示した。

②明治8年以降の職務と近世の学習履歴との関連

東海は、他地域の教導取締や地元の郵便取締役につき、学務委員を務めるなど、幕末を乗り越えて「出世」していった。また、書籍を介したネットワークでつながっていた由緒ある中村家に養子入りして、地方名望家として活躍した。近世までに学んだ学問や教養はその内容だけにとどまらず、「家」のアイデンティティを表す。そのため、東海は近世の頃から同じ学問を学び、同じ家業に携わる地域の指導者たちと人脈を構築し、明治以降にも活かしていった。

近代以降に習得した近代の学問についても調査したが、明治8年段階までにその様子を確認できなかった。今後、明治8年以降も視野に入れて検討していきたい。

（2）筑前国高原謙次郎[12]（天保8年～大正5年）

本事例の対象時期は、幕末から明治半ばである。

高原家は、近世において代々村役人を勤めた家である。例えば、謙次郎の祖父は大庄屋を勤め、実際の農事にも携わり、年貢皆済や飢饉の対応によって藩からも高い評価を受けていた。謙次郎の父和作は嘉永元年から安政4年の10年間のできごとを一つ書き形式で記しているが、特に農事に関わる記事が多い。特に収穫への関心は高く、収穫に関わる天候不順や飢饉についても書かれ、他国の災害や農作物の状況にも目を向けて、自らの危機に備えようとしていた。記事からは、飢饉に陥る可能性を常に抱え、村役人として危機感をもち非常事態に備えようとしたことがわかる。このような精神を支えたのが、家人の「家世業農」との自覚と誇りだったと思われる。

近世後期における謙次郎の学習内容とその環境について、書籍蒐集と学問をとりまく人的ネットワークを調べた。高原家には謙次郎が作成した文久3年の書籍目録が存在する。書籍目録に記載された書籍名は1700点に及ぶ。書籍目録より、漢学書、漢籍を中心としながらも多様な蔵書傾向がうかがえる。なかでも医学書、国書（和歌や神社関連）、俳諧等は一定の量があった。多数の書籍を所蔵し、それを項目に分けて整理している点に、高原家の人や謙次郎の学問及び教養の高さをみることができる。農業書に関しては、所蔵する農業書が3点と少ないこと、「農業」の項目がたてられなかったこと、家人の執筆した農書がみられなかったことより、高原家の場合、実際の農事への関心は高いが、農業に関する知識を書籍から得たり、農業技術を執筆という形で子孫や地域の人に伝えたりする様子はうかがえなかった。学問をとりまくネットワークとしては、福岡藩の儒者や勤王の志士や福岡入りした五卿がいた。例えば、月形洗蔵、三条実美、平野国臣などである。この中には、時勢によって「罪人」とされた知識人もいたが、謙次郎は監守役をしていた血縁者等の人脈によって彼らと交流していた。それは学問や集書にも関わるネットワークとしても機能し、学問（漢学、国学、和歌など）をともに学ぶなど、充実した学習環境になっていた。

明治に入ると謙次郎は、老農として活躍した。その一例が近世以来の農事記録の編纂である。この農事記録は主に、近世の高原家祖先と近世以来の人的ネットワークにより入手した。謙次郎の編纂物から特に読み取れるのは、飢饉への対応である。農業が発展していく明治においても、人の思い通りにならないものが天候であり、悪天候や災害による飢饉は人々の生活や命に関わる重大事だった。そのため、近世の飢饉を乗り越えてきた地域の老人の経験や「旧記」や農業書の対応に学ぶことで、明治の危機も乗り越えようとした。まさに近世以来の「経験」に価値があった。地域の農民は、老農が近世以来の祖先の記録を蓄積し、情報を得る人的ネットワークを持ち得た点も支持していたと思われる。謙次郎の近世までの農事経験や学習履歴は、明治期以降の編纂物の執筆や集書に活かされていた。

明治期における近世以来の農事記録の活用の契機は、謙次郎の明治 11 年から同 25 年の職務にあった。福岡県は、明治 11 年から県内の老農を農業行政の中核に置いた。謙次郎は老農として郡書記等の職務に就いて活躍した。謙次郎が福岡県の農業行政の職務に就いた時期と農業書の集書及び近世の農事記録編纂の時期はほぼ重なる。先行研究は老農の明治以降の活躍に注目したが、本研究は、先行研究[13]が示してきた明治以降の老農の活躍に加えて、明治期の農業制度の中でこれまで抽象的に語られてきた老農の近世以来の経験の活用を具体的に提示したものである。

（3）「学制」成立期の群馬県の小学校教員[14]

①群馬県の小学校教員に求められた資質能力

本事例の対象時期は、幕末から明治 6 年である。

群馬県の小学校教員を事例にとりあげ、「学制」成立期の教員の資質に着目した。「学制」成立期の教員の資質に関する先行研究[15]は、主に教員資格に着目してきたが、実際には明治半ばくらいまで無資格教員の多い時代が続いていた。このように、「学制」成立期には無資格教員が多数存在したのにも関わらず、無資格教員の資質能力についてはほとんど検討されてこなかった。そのため、本研究では、無資格教員も対象に含めて「学制」成立期の教員の資質能力について検討した。結果、以下の 3 点が明らかになった。

1 つは、明治 4 年以前に習得した学問である。ほとんどの教員は漢学を学び、多くの教員が複数の学問を学んでいた。履歴書で確認できる限り、その順序は漢学の次に他の学問を習得していた。このように、漢学は他の学問を学ぶ際の基盤になっていたとみることができる。つまり、近代の教員に求められる新しい学問を習得していく際に、近世までに習得した漢学の素養を活かしたとみられる。

2 つは、明治 4 年後に習得した学問である。多くの教員が小学教則、洋算、洋学を学んでいることから、これらの学問習得が近代の教員に求められた資質と考えられる。こうした学問を習得した場所は、伝習学校と金子精一と沼津兵学校であり、教員になるルートにもなっていた。

3 つは、伝習学校を卒業していない無資格教員の教員「資格」である。群馬県では、伝習学校設立前に前橋小学校が設立されたため、必然的に無資格教員が存在することになった。このような無資格教員は伝習学校がないことを理由に、近世までの学習履歴のみで近代の教員になれるわけではなかった。こうした状況を克服するために、伝習学校設立前の群馬県では、金子精一が教員養成の役割を担っていた。実際、前橋小学校の教員（無資格教員）のほとんどが、金子精一のもとで学んでいた。洋学や洋算などに精通し、学務専任として文部省へ出向き「学制」の理念や学科、教授法を直接学んだ金子精一を通じて、彼らは近代の教員にふさわしいとされる洋学や洋算を学ぶと同時に「学制」に基づく学科や教授法、つまり小学教則も学んだと推測される。

② 「学制」成立期の教育課程の特徴

当該期の各府県の小学校の教育課程に影響を及ぼしたといわれるのが文部省と東京師範学校の作成した小学教則である。2 つの機関が提示した下等小学教則の特徴を以下にまとめる。

文部省は「学制」成立期に 2 つの下等小学教則を公布した。その教授内容は、近世以来の読み書き算と近代の新しい学問である理科や地理、保健、修身で構成された。教授方法として、教科書の使用のほか、近世以来の基本的な読み書きや藩校や学問塾（漢学塾、洋学塾、国学塾など）などで用いられた素読、輪講という方法を用いながら近代の知識の習得も目指した。

一方、東京師範学校では、「学制」成立期に 3 つの下等小学教則を出した。3 つの下等小学教則を対照してわかったことは 3 点である。1 つは、改正を重ねても教科数や教科名は変わらなかったことである。文部省の小学教則と対照すると教科名や教科数に違いはあるものの、実際の教授内容編成は大きく変わるものではなかった。2 つに、先行研究では指摘されていないが改正を重ねるにつれて、複数の教科の教授内容が高度になったことである。「書取」「作文」「問答」など複数の教科において、改正を重ねるうちに教授内容が下位の等級に繰り下がるようになり、結果として児童は当初より高度な内容を学ぶことになった。3 つに、改正を重ねるにつれて教授方法を詳細に記すようになったことである。「算術」「諸科復習」「体操」という教科の教授方法が詳しく説明されるようになり、より充実した内容になってきた。

文部省と東京師範学校の小学教則の大きな違いは教授内容よりもむしろ教授方法にあったと考えられる。両者の小学教則は、各府県の小学教則のモデルとしての役割を有していた。そのため、さまざまな教授方法を各府県に示すことに意味があった。文部省は主に近世以来の教授方法を提示し、東京師範学校は主にアメリカの小学校から導入した教授方法を提示した。

（4）3 つの事例を通じて明らかになった点と課題

本研究では 3 つの事例を通じて、近代の職業（職務）における近世の学問や経験の活用及び展開について実証した。しかし、課題も残った。それは近代の職業（職務）に対応した新しい学問習得について、十分に検討できなかった事例もあったことである。調査を進めるうちに、事例ごとに職業（職務）転換の時期が異なることがわかってきた。例えば、

群馬県の小学校教員は明治5年くらいに教員になるが、筑後国の高原謙次郎が「近代」を反映した職務に就くのは明治 11 年以降である。研究当初は、事例により多少の違いはあっても明治 10 年までに「近代」を反映した職業（職務）に就くだろうと予測したが、予想以上にその時期に幅があった。また、近代の職業（職務）に対応した学問習得の時期も事例ごとに異なる。このような事情もあり、一番初めに着手した中村家の事例については対象時期を適切に絞り込めなかった。結果、近代に対応した学問習得についてはほとんど明らかにできなかった。今後は、職業（職務）の違いなど特徴ごとに事例を選択し、近代における近世の学問や経験の意義や展開についてさらに分析や考察を深めていきたい。

＜註＞

1　松尾由希子「江戸期上層庶民の家の蔵書に関する研究—学習環境の視点から—」（博士論文）、平成 20 年 12 月 26 日。
2　入江宏「江戸時代は生涯学習社会だった」『現代農業』増刊、農山漁村文化協会、1996 年
3　幕末維新期学校研究会・高木靖文編『近世日本における「学び」の時間と空間』渓水社、2010 年。松尾由希子「伊勢国溝口幹の『日乗』にみる生涯学習主体の形成過程」同上書、淡水社、2010 年。
4　松尾由希子「明治初年御師の継嗣における読書の意味—伊勢国溝口幹『日乗』の分析より—」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）』第 52 巻第 2 号、2006 年。
5　高久嶺之介『近代日本の地域社会と名望家』柏書房、1997 年、第 1 章。坂本紀子『明治前期の小学校と地域社会』梓出版社、2005 年、3 頁。など
6　前掲註 4。前掲註 5。
7　尾藤正英『江戸時代とは何か』岩波書店、1992 年。
8　朝尾直弘『大系　日本の歴史 8』小学館、1988 年。
9　前掲註 4、7 頁。
10　「5．主な発表論文等」③⑤参照
11　鈴木理恵『近世近代移行期の地域文化人』塙書房、2012 年、62 頁。榎本博「近世地域社会における蔵書と『家』」『国史學』201、国史学会、2010 年、115 頁。松尾由希子「近世後期尾西庄屋のネットワークと教養形成—海西郡荷之上村服部家の蔵書と読書の分析—」岸野俊彦編『尾張藩社会の総合研究第三篇』清文堂出版、2007 年。など
12　「5．主な発表論文等」②参照
13　西村卓『「老農」時代の技術と思想—近代日本農事改良史研究』ミネルヴァ書房、1997 年など。
14　「5．主な発表論文等」①④⑥参照
15　牧昌見『日本教員資格制度史研究』風間書房、1971 年、第 1 章第 1 節。など

5．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 6 件）

① 松尾由希子「『学制』成立期の小学校・中学校における教育課程の編成に関する基礎的研究（1）—文部省及び東京師範学校の『小学教則』・『中学教則』の分析—」『静岡大学教育研究』11、2015 年、1-23 頁、査読有。
http://ir.lib.shizuoka.ac.jp/bitstream/10297/8577/1/11-0001.pdf

② 松尾由希子「明治中期一老農における近世の農事記録の活用とその背景—福岡県高原謙次郎の集書と編纂物の分析—」『民衆史研究』
第 88 号、2014 年、41-56 頁、査読無。

③松尾由希子「幕末維新期における遠江国神職の書籍の蒐集と移動—養子縁組に着目して—」『日本の教育史学』第 57 集、2014 年、6-18 頁、査読有。
http://ci.nii.ac.jp/els/110009844775.pdf?id=ART0010359676&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1431761153&cp=

④松尾由希子、山下廉太郎「『学制』成立期の教員の資質能力—近世・近代移行期における群馬県教員の履歴の分析—」『静岡大学教育研究』10、2014 年、1-16 頁、査読有。
http://ir.lib.shizuoka.ac.jp/handle/10297/7790

⑤松尾由希子「近世後期から明治初年における遠江国神職の蔵書傾向—敷知郡宇布見中村家の蔵書の内容とネットワークの分析—」『静岡大学教育研究』8、2012 年、1-18 頁、査読有。
http://ir.lib.shizuoka.ac.jp/handle/10297/6619

⑥松尾由希子「『学制』初期の教員の資質能力に関する研究の課題—近世・近代の移行期に着目して—」『静岡大学教育実践総合センター紀要』20、2012 年、291-298 頁、査読有。
http://ir.lib.shizuoka.ac.jp/handle/10297/7365

〔学会発表〕（計 1 件）

① 松尾由希子「幕末維新期における遠江国神職の書籍の蒐集と移動—養子入りと三河国との関係に着目して」教育史学会第 56 回大会、2012 年 9 月 23 日、お茶の水女子大学（東京都文京区）

6．研究組織

(1)研究代表者

松尾　由希子（MATSUO Yukiko）
静岡大学・大学教育センター・講師

研究者番号：30580732